『中東・イスラームのフィールドワーク』

堀内正樹

講義ノート（9）

～イスラーム社会のしくみとバイアについて～

こんにちわ。さて今日は今までとは少し趣を変えて、理念的な話から入ろうと思います。前回「バイア」という言葉がキーワードとして頻出したのですが、まだその意味をしっかり説明してなかったので、「バイア」とはなにかということを明確にしたい。そのためには具体的な事例からいったん離れて、理念的な説明から始めたほうがわかりやすいと思うからです。とはいっても政治学や歴史学のようにこの語に付される理念や概念の分析に終始するのではなく、あくまでも地べたを這いつくばってきたこれまでの自分の経験に基づくことは言うまでもありません。

これまでバイアは日本語では「忠誠の誓い」と訳されることがほとんどでした。かくいう私自身もある時期まで無反省にそうしていました。これは英訳が「Pledge of Allegiance」となっているからです。「Pledge of Allegiance」はいうまでもなくアメリカで日々日課のようにおこなわれている国旗と国家に対する「宣誓」の表現ですよね。キリスト教や国家主義的な発想が出発点にあることは明白です。これをさらに日本語に訳したとき、「忠誠」には敬意と服従という儒教的要素が加わり、「誓い」のほうには変わらぬ信念といった倫理的要素が付加されました。その結果「忠誠の誓い」は心底からの絶対服従の表明であり、変更したり軽んじたりすることは宗教的・倫理的に破廉恥なこと、非難されるべきことと見做されるわけです。ところが「バイア」にはそんな余計なものはいっさいなく、もっとずっと柔軟で現実的なんです。そのことを説明してゆきましょう。

**********-

【第 1 段階】

説明は幾つかの段階を追って進めます。まず最初は、世の中がどういう状態にあるかという価値観抜きの現状認識からです。アフリカ～地中海～中東～中央アジア～インド～東南アジア～中国といった広大な地域を想定してください。仮にこれを「広域世界」と呼んでおきます。イスラーム教徒が他の人々と混じって生きてきた世界と言い換えてもいいでしょう。この広域世界は遅くとも 13 世紀にはすでに一つながりになっていて、今日に至るまでさまざまな人、モノ、情報が行き交ってきたわけです。グローバリゼーションなんていう最近の話じゃないんです。それが良いとか悪いとか、そうあるべきだとかそうあってはならな

いとかといった議論の問題ではなくて、世の中はそういう状態にあるんだということをまず認めなければ始まりません。この状態は都市だけではなくて、田舎でも山岳でも砂漠でも島でも、程度の差こそあれどこにでもいえることです。私自身、数十年にわたって僻地を含めていろいろなところを歩き回ってきて、実感しているところです。

さてそれでは多種多様な人々が行き交い、接触し合うとすれば、どういうことが生じるでしょう。偶然の出会いが増え、よくわからない得体の知れない人物と接触することになったら、まずは相手がどういう人物かを推定しなければ話になりません。方言を含めて相手がどんな言葉をしゃべるのか（マルチ・リンガルなんて珍しくありませんよ）、どんな服を着ているか、どんな食べ物や飲み物が好きなのか、家族はいるのか、どこに家（やテント）があるか、どんな仕事をしているか、祖先はだれか、部族はどこか・・・。そうしたさまざまな基準を引っ張り出してきて相手の素性を推定します。積極的に相手にそうしたことを聞くこともあれば、ヒジャーズ地方の大物部族長みたいに自分は黙っていて相手にしゃべらせることもあるでしょう。ともかく相手に関する情報量が多い方が有利であることは当然ですから、「対話」が不可欠になります。人と会うことや対話することを拒むのは自分の首を絞めるようなものです。

ではモノについてはどうでしょう。モーリタニアの田舎町タグジュジュトというところに市場があったのでのぞいてみたら、あるわあるわ、なんでこんなものがここにあるの、と驚くほど多種多様なものが並んでいました（TOTO のウォシュレットのコントローラーとおぼしきものだけ売ってましたけれど、あれ、どうするんですかねえ）。しかも、どこに行ってもそうですが、商品の差別化が進んでいて、二つとして同じものがないといっても言い過ぎではないでしょう。肉や野菜についてはわかりやすいですよね。品質が全部違います。中古品もそうですよね。そうすると、どの品が良いか悪いかの評価能力は当然必要になりますが、それと同じくらいに、あるいはそれ以上に、その品がどこから来たのか、だれの手を経てきているのかという情報が大事になります。つまり人に関する情報ということになります。そして信頼できそうな人的ルートを把握したら、その人との付き合いを確保しておきたいというのは人情です。目の前のモノそれ自体よりもむしろ付き合いのほうが大事ということですね（接待で帰宅が遅くなるサラリーマンのお父さんの気持ちがよくわかります！）。付き合いと対話。

では情報はどうでしょうか。真偽不明のさまざまな情報が大量に行き交うとき、どうしたらよいでしょう。まずは情報源を広くとるということが大事ですよね。偏った狭い情報だけでは判断を誤ります。判断を誤ったとき、責任をとるのは他人ではなくて自分しかありません。人のせいにしても損するのは結局自分です。そこには徹底した個人主義と自己責任がベースにあるわけです。ですから好き嫌いにかかわらず、だれとでも話すということが重要になります。それがたとえ敵であったとしてもです。そうしたうえで信頼できそうな情報源を確保するためには、モノの場合と同じように、信頼できそうな人脈を確保することが重要で、ここでも対話と付き合いが浮上してきます。そして情報を判断するための理性と合理性

が求められることになります。情緒や義理や忖度などとはまったく対照的な冷静さですね。

【第 2 段階】

こうしてみてくると、「広域世界」では多種多様な人とモノと情報が行き交うのだということを前提とすれば、ともかく人と話すこと（＝対話）と人と会うこと（＝付き合い）が他の何にもまして優先されるということがわかります。そうすると今度は移動することが必要になってきます。動かずに座しているだけでは人と会う機会も少なくなり、対話も付き合いもほとんどできません。ステイホームで情報がどんどん閉ざされてゆく経験を今皆さんしていると思います。だからふだん以上にネットや SNS に依存せざるを得ないでしょう。自由に移動できればそんなことはありませんよね。かつてモロッコのスース地方のベルベルの村に滞在していたとき、居候先のアーイシャおばさんが、朝寝坊をしていつまでもグタグタしている私に「男たるもの、朝のうちに 10 軒の家を回ってこい」という地元のことわざを教えてくれて、家から追い出されました（泣）。なにも用事がなくてもどこかへ行ってこいというのですから、男はつらいよ！

では移動するにはどうしたらよいでしょうか。旅行で知らない土地にひとりで降り立ったことを想像してみてください。初めての場所で土地勘もないし、知り合いもまったくいない。そうなれば自分にできることはごく限られますよね。でも誰か一人でも知り合いや友達がそこにいれば、自分の活動範囲も活動内容も情報も、その人を介して格段に広がります。「そういうの、うざったいから、やっぱり一人旅がいい」という感傷旅行のような場合は別にして、人とのコネはあった方がいいわけです。そうすると何が起こるでしょうか。いろいろなところからいろいろな人がそれぞれのコネを使って集まって来たり、出かけたりしてゆく。人は当然モノや情報も携えて移動します。だから結果的に多様な人とモノと情報が行き交うことになる。つまり今日述べた最初の第 1 段階の状態が次から次へと再生産され続けるわけです。対話〜移動〜コネの循環と言ってもいいですね。

こうした移動のためのコネの連鎖を人によっては「ネットワーク」と呼ぶのですが、注意しておかなければならないのは、ネットワークという概念はつながった状態を表現しているということです。切れた状態は想定していません（切れていたらネットワークになりませんからね）。しかし「広域世界」における現実の人間関係は切れることを前提としています。これはひじょうに重要なことです。切れるからこそ、切ってよいからこそ、どんな人間関係（＝コネ）も新たに自在に取り結んでゆくことができます。ちょっと考えてみてください。だれかと仲良くしたいとき、「あなたと仲良くしたいのはやまやまだけど、そうするとあの人の顔が立たなくなるから、ごめんね」とか、「あの人に恩があるから・・・」「あの人には義理があるから・・・」といっていたのでは、新しい人間関係は開拓できません。「絆」とか「つながり」がさも良いこと、美しいことであるかのような雰囲気の中では、それに縛られてしまって、臨機応変に状況の変化に対応する自由な人間関係は展開しないのです。はじめは皆さん戸惑うかもしれませんが、この「切れることを前提としたつながり」が後ほどバ

イアのところでも登場します。なんて薄情な世界なんだ、「義理がすたればこの世は闇だ、なまじとめるな夜の雨♪♪」なんていっていると（ワセダの皆さん、ごめんなさい）、偶然性と多様性に満ち満ち、刻一刻と移り変わる「広域世界」では生きてゆけないないのです。それに、それを補って余りある知恵というか方法が次の第3段階で用意されているのです。

【第3段階】

人がどこへでも気軽に出かけていって、だれとでも会って話し、商売人の場合ならだれとでも取引できる。このあたりまえのことが保証されるためには、二つの大原則が必要になります。

一つは「平等」（＝対等）ということです。自由な情報交換や取引の前提には、世間や市場にかかわる人すべてに平等が保証されなければならないというわけです。貧富差、言葉、宗教、人種、出身、部族、教育、その他もろもろ、そうした数々の差異を超えて、万人に平等が与えられなければ第1段階と第2段階のような自由な状況は成立しないのです。考えてみればあたりまえですよね。人は一人一人みんなかなり違っている。なのにその違いのどれかを取り上げて移動の自由や会話の自由、取引の自由を取り上げられたらたまったものじゃない。貧乏人は金持ちの前では黙っていろとか、力の弱いヤツは強いヤツに文句を言うなとか、黒い人間は白い人間と接触しちゃならんとか、お客様は神様だとかいって威張ってみるとか、こういうことではダメなわけです。教養のない者は往々にしてそういうことを平気でするけれども、教養人はそんなことはしない、とよく言われます。

二つ目の大原則は「公正」（＝公平）ということです。虚偽や不正や不公平があると情報交換も商取引も成り立ちません。平気で嘘を言うヤツとまともな会話ができるでしょうか、分量や品質をごまかすようなヤツからものが買えるでしょうか、資金力や権力を笠に着て不当な圧力を加えてまともな商売を邪魔するヤツを許せるでしょうか。まっとうでなければ「広域世界」はすぐに行き詰まります。行き詰まったらみんなが困ることになります。

こうした「平等」と「公正」という二大原則こそ、じつはイスラーム法（シャリーア）のコアーとなる精神だといわれています。たとえば、メッカ巡礼（ハッジ）がそのよい例だとされるのですが、金持ちも貧乏人も黒人も白人も健常者も障害者もみんな質素な同じ服装で参加し、王様や大統領であっても特別扱いはされない。神の前には人間は皆平等であって、預言者ムハンマドでさえその例外ではない。断食（サウム）もそうだといわれます。どんな大金持ちでも断食が始まれば何も食えない。貧乏人と同じだろう、と。

喜捨（ザカート）というのもあります。これがじつは社会的にはひじょうに重要で、「困っている人から助けを求められたら、できるだけ援助してやらなければならない」という項目です（これが個人単位ではなく社会単位でおこなわれるとき、「ワクフ」とか「ハブース」という制度となります）。この精神はいろいろな場面で登場します。たとえば貧乏人は金持ちに堂々と胸を張って援助を求め、金持ちはそれを拒否できない、つまり束の間ではあれ、

貧富格差の解消につながります。人が自己努力でカネを貯めて大金持ちになることは決してとがめられることでも、非難されることでもない。世の中に貧富差があるのは、世の中にのっぽとちびがいるのと同じように、あたりまえのことである。どんどん稼ぎなさい。しかし金持ちが金を出し渋って困っている人を放置するのはけしからん、ということなんですね。「ケチ」という言葉がひじょうに嫌がれるのはそういうことなんです。そして貧乏人は金持ちからカネをもらっても、卑屈になったりお礼を言ったりする必要すらない。堂々としていていいのです。なぜそうなるか。

ちょっと脱線しますが、これはなぜみんな進んでイスラーム法を尊重するのかという問いの答えにもなります。それは「最後の審判」と呼ばれる終末の日のイメージに立脚します。この世界を創ったのは神様ですから、神様はいつの日かこの世界を終わらせる（それが5分後なのか50億年後なのかは神様以外だれにもわからない）。その日、つまり最後の日が来ると、天地鳴動、大混乱が世界を襲い、それが収束すると今生きている人間はもちろん、墓の中で眠っている人間もみんな呼び起こされ、神様の前に整列させられる。そして各人の両肩にとまっている天使が自分の担当する人間のこれまでの善行と悪行のそれぞれの総計を神様に報告する。それを受けて神様は、右の扉から天国に行く人間と、左の扉から地獄に行く人間をふるい分けて宣告する（＝これが最後の審判）。善行が勝っていれば天国、悪行が勝っていれば地獄です。その際金持ちかどうかとか身体の形とか色とか、そのほか人間のもろもろの属性はいっさい考慮されず、ただひとつ、善行が悪行に勝っているかどうかだけが判断基準になる。だから人間は「右の人々」（＝天国に行く人々）か「左の人々」（＝地獄に落ちる人々）かというのが唯一の最終的な分類基準であって、他の違いはどうでもよい無価値なことなのです。「地獄に落ちたってかまわない」という不届き者に対しては、地獄の情景がこれでもかこれでもかというくらいコーランの中で述べられています。地獄にはシャイターン（サタン）が待ち構えていて、送り込まれてくる人間をつまみ上げては燃えさかる劫火の中に投げ入れる。するとそいつは髪も肌も肉も焼けただれ、これ以上ない苦しみにのたうち回り、「もうたくさんだ、死なせてくれ」というとシャイターンがそいつを火の中からつまみ出して入り口に戻す。すると身体は元通りになってやれやれ。と思う間もなくシャイターンはまたそいつをつまみ上げて劫火に投げ入れる。そして焼かれて・・・。これが終わることなく永久に繰り返されるというのです。

さてそうすると問題になるのが、どうしたら善行を増やすことができるのかということになりますよね。そもそもどういう行為が善行に相当するのか（善行は「ハサーナ」といいます）。そこでもっともわかりやすくてだれでもが知っているのが「五柱（ないし五行）」と呼ばれている(1)証言（シャハーダ）、(2)礼拝（サラー）、(3)断食（サウム）、(4)喜捨（ザカート）、(5)メッカ巡礼（ハッジ）の五つです。神様が預言者ムハンマドを通じて指示してくれたのですから、これらは文句なしの善行です。このうち喜捨をのぞく四つは自分の問題ですから、各人頑張ってねということになりますが、喜捨だけは他人あっての行為です。だか

らこれが社会的には一番大事になってくるのです。

で、話を戻すと、なぜカネをもらった人がくれた人に感謝もお礼もしなくてもいいか、でしたね。金持ちは貧乏人から助けてくれといわれて助けてやった。これは喜捨の精神からして明らかに善行です。金持ちはそれだけ天国が近くなったわけです。とすれば貧乏人は金持ちが天国に行けるようになるのを手助けしてやったのですから、お礼を言われることはあっても、金持ちにお礼を言う筋などさらさらありません。でもそれではあんまりですから、助けてもらったほうは「神様があなたにご褒美をくださいますように」と言って祈ってあげるだけでよいのです。

さてこうして喜捨の精神は結果的に人々を平等性と対等性の方向に向かわせます。困ったときはだれにでも遠慮なく助けを頼んでもよいというのは、先ほどちょっと言った「なんて薄情なんだ」「義理がすたれても平気なんて」という不安を無用にしてくれるわけですね。私はずいぶん長い間あちこちを気の向くまま旅してきましたが、行き暮れて泊まるところがなくなったとき、近くの家に「泊めてください」といって断られた記憶がありません。それどころか必ずといってよいほど食事も振る舞われます。はじめは「みんななんてホスピタリティーに富んだ優しい人たちなんだろう」と思いましたが（最初の旅で、イランの建築中の家に雨を避けて転がり込んだときに助けてくれた老人も含めて）、ある時期から、もしかしたら「旅する人は困っている人だから頼まれたら断れない」という喜捨の精神が生きているのではないかと思うようになりました（ちなみに旅人は妊婦さんや病人と同じように、弱者として断食の義務からも免れています）。そしてもう一つわかったのは、そういうときにお礼を渡すべきではないということなんです。泊めてもらったときばかりでなく、何か助けてもらったり、教えてもらったりしたときもそうです。せっかく相手が私を助けてくれたのに、逆に相手にお金なんか払ったら、相手の天国行きの善行に水を差すことになり、かえって失礼なんじゃないか。カネやお礼なんかを目当てに人助けをしているんじゃない。いくつもの具体的な経験に顧みて、どうやらそう言ってよい気がします。同じ理屈で、相手を訪ねるときにお土産を持って行くのもいかがなものかと思います。（義理を喜捨に置き換えて「喜捨がすたればこの世は闇だ、なまじとめるな夜の雨♪♪」という男気を感じるのは私だけでしょうか。）

そう考えるとニュースのネタにも思い当たる節がずいぶんあるような気がしているのです。まだ皆さん覚えているでしょうか、イラク戦争のあと、アメリカから極悪非道の悪の枢軸などと言われて追い回されたサダム・フセイン大統領の最後を。彼はイラク中部のとある農家の庭先に掘った地下壕で発見されて引きずり出されました。なぜ一介の農民が、先日まで権力の頂点にあったとはいえ今は落ちぶれてみるかげもないフセインをかくまったのか。それも相手は世界最強のアメリカ軍です。だれもそのことを考えませんでしたよね。その田舎の農民がフセインに義理があったとはとても思えません。おそらく喜捨の精神でしょう。助けてくれと言われてかくまう（助ける、庇護する）となったら、たとえ相手が世界最強の軍隊であっても、最後までリスク承知でかくまい通す。神様の約束のほうが米軍よりは強いですからね。その際フセインが善人だったか悪人だったかなん

て関係ないことだったでしょう。それは人間が判断できることではなく、最後の審判で神様が判断することになるわけですから。

もうひとつ、同じような例がビン・ラディンです。アル・カーイダのビン・ラディンをかくまったアフガニスタンのタリバンは、やはりアメリカが執拗に引き渡しを求めても、最後までそれを拒んで庇護し続けました。結果的に米軍の容赦ない猛爆にさらされてもです。ただしこのときはタリバンもちょっと悩んだのでしょう。かくまい通すべきか否かを、イスラーム法に通じた国中の専門家を集めて諮問したんです。その結果、イスラーム法廷になら引き渡してもよいという結論を得たわけです。ところがアメリカはそれを一顧だにせず、結局今日にまで至る悲惨な泥沼に人々を引きずり込んでしまった！まあこういったニュースネタは他にも数多くあるのですが、私が直接かかわったことではなく、事実かどうか確かめようもないので、やめておきます。

「平等」と「公正」の二大原則についてもう少し。この二つの原則は人間中心主義と当事者主義とリンクしています。具体例を挙げると、イスラーム法の中に利息の禁止というのがあるのをご存じかと思います。人間が努力して金持ちになるのは何の問題もないわけですが、何もせずに寝ていてもカネがカネを生み出すというのが利息な訳で、それはけしからんということです。これでは不平等に拍車がかかるだけで歯止めがかかりません。カネが人間を支配するようなことがあってはならないという、いってみれば人間中心主義がそこにあります。もちろん公正さがそのもとにあるわけです。ちょっと余談で、利息とは違いますが、油が生み出す収入で何もしなくても寝ているだけで巨万の富を手に入れてきた産油国の王族たちに人々の人気がないのもおそらく同じ理由です。ですから彼らは必死に寄付や援助をおこなって、不公正のそしりを免れようとしています。

次に、もめ事は示談によって解決するという原則があります。もめ事や紛争は世の常で、古今東西、決してなくなることはありません。そのときにどうやって決着をつけるかというと、当事者同士の話し合い、つまり示談が原則になります。しかしそう簡単に示談が成立するわけはありませんよね。そんなに簡単だったらはじめからもめ事は生じないでしょう。そこであいだに仲介者（調停者）を立てます。これは無関係な第三者のほうが都合がいいですよね。しかも公平・公正な人物。ここでイスラーム法の専門家が引っ張り出されます。なんといったってイスラーム法は「平等」と「公正」を旨としていますから。この専門家は一般的には「アーリム（複数形はウラマー）」（＝知識人）と呼ばれます。そしてアーリムの調停案（裁定といってもよいでしょう）を両当事者が納得して受け入れればめでたし、めでたし。しかし当事者のどちらか、あるいは両者とも、が不満を抱けば、別のアーリムを呼んできて調停してもらう。それでもダメならまた別のアーリム、というふうにして、決着がつくまで繰り返します。ふつうはある一定の時点で妥協が成立するでしょう。誰しもいつまでもゴチャゴチャやっているのはたまりませんから。

ここで重要なのは、主役はあくまでも当事者であるという点です。欧米や日本のように、当事者が不満でも裁判官の決定には従わねばならない、という非人間的な不合理な現象は

生じないのです。それに被害者補償というか、被害者の権利が最大限に尊重されます。さらに興味深いのは、集権的な裁判制度と違って、砂漠でも山奥でも僻村でも、アーリムは呼べば来てくれます。そもそも、片田舎に暮らす人たちが大都会の裁判所になんてホイホイと行けるわけもありません。そしてアーリムはそれぞれのローカルな実情に合った調停案を出してくれます。臨機応変が成り立つわけです。しかもアーリムはふつう政治的な枠組み（たとえば国家）を超えた世界大の知識人ネットワークに組み込まれて旅をしていますから、その調停案はその人の恣意的な判断や特定の権力に依存する危険性から免れていて、拠って立つ正当性はいわば普遍的ともいえるわけです。

こうしてみると、イスラーム法というのは、中央集権的な権力を前提とせずに、世界の津々浦々でくまなく「平等」と「公正」という社会秩序を維持する役割を果たしているといえるでしょう。カトリック世界のバチカンのような中央集権機構を必要としない、あるいはそういうものがあったらかえって邪魔になるわけです。ですから人によってはイスラーム法を国際法とか万民法とか普遍法とか呼ぶことすらあるのです。

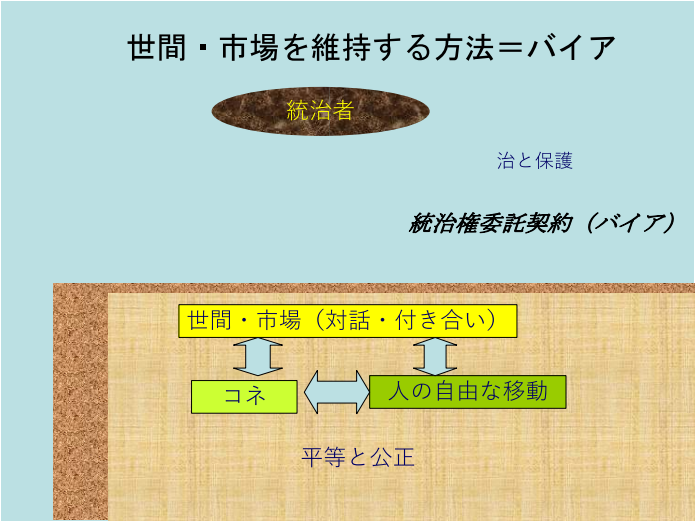
そして関連してもう一つ注意すべきは、イスラーム法はイスラーム教徒だけに適用される約束事ではないという点です。全人類はすべからく神の被造物だという前提に立てば、キリスト教徒であれユダヤ教徒であれ仏教徒であれ、神が示したこの約束事を尊重する者でさえあれば、だれでも歓迎されるということです。「最後の審判とかいう話は信じろといわれてもちょっとねえ」と考える人であっても、平等と公正に合意する人であれば参加できるのです。

このような、今示してきたいくつもの事柄を集約するような形で現れるのが、いよいよ次の段階で説明する「バイア」ということになります。

【第 4 段階】

さていよいよ最終段階です。平等と公正というイスラーム法の理念に裏打ちされて、人々の自由な対話や交渉がおこなわれ、それに付随する自由な移動が保証されるというのは、じつは理念というか理想に過ぎません。そのままでは絵に描いた餅です。というのも、実際には世の中には嘘をつく、人をだます、不正をする、圧力をかける、人の邪魔をする、といったことは後を絶たないからです。ウラマー（イスラーム知識人）は問題が起こったらその対処はしてくれますが、問題が起こらないようにはしてくれません。そこでどうしたらよいか。結局は「力」に頼るしかないのです。世間（市場）の秩序つまり平等と公正を維持することのできるだけの力を持った人間に秩序維持を依頼します。そしてその人間は依頼されたら断りません（喜捨の精神と同じ構図です）。ただし引き受けて人々に保護を約束する代わりに、自分の言うことを聞くように要求します（そこが喜捨とは異なります）。そうでなければいくら腕力があっても何もできませんから。これが統治権ということになります。契約に基づく正当性を持った強制力といってもよいでしょう。それがなかったらただの無頼の暴れん坊です。こうした「秩序維持依頼」と「統治権要求」のバーター契約のことを「バ

イア」と呼ぶわけです。ですからバイアは「統治権委託契約」と訳すのがいいのではないかと私は思っています。下にこのしくみをわかりやすく図にしてみました。



そうすると、ここで確認できるのは、人々と統治者という両契約当事者はまったく対等の立場にあって、どちらがどちらよりも偉いといったことは全くないのだということです。取引契約というのはそういうものですよね。まして統治者が「宗教権力を持つ」などということはあり得ないことです。統治者は単に秩序維持を任されただけの、言うなれば世俗的人物に過ぎません。

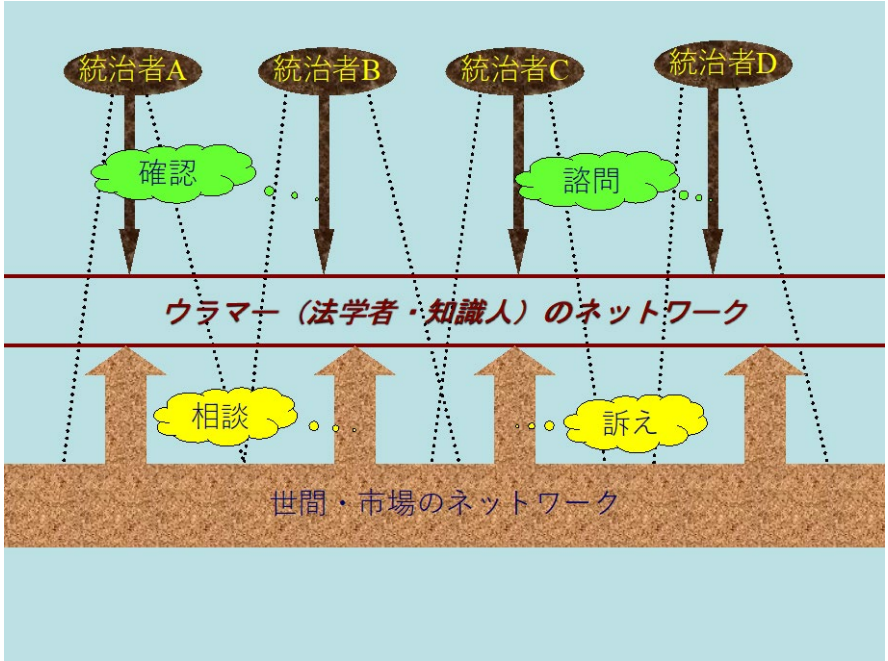
統治者はスルタンと呼ばれますが、20 世紀以降いつしかマリク（所有者、国王）という呼び名が普及してしまって、そのせいか西欧近世の絶対王政的な国王概念がイスラーム世界の統治者にもかぶせられてしまったんでしょうね。まったく的外れです。なおオマーンや UAE などでは王様はいまだにスルタン（統治者）やアミール（指揮者）という語を使っています。

ここでついでですから、もう一つ誤解というか、混乱を取り除いておく必要があります。それは「ウラマー」の地位についてです。ウラマーはイスラーム学の勉強を重ねた「知識人」のことですが、必ずしも専門職でも専門階級でもありません。多くは学校の先生などをしているとはいえ、ウラマーが商売に携わって金儲けをしたり、あるいは政治家になったって一向に構わないのです。日本でも博士号や修士号を持った経営者や大臣がいても不思議ではないですよね。それに加えてもう一つ。ウラマーはしばしば「聖職者」とか「宗教リーダー」あるいは「僧侶」などと訳されることがありますが、これらも間違い。たしかにイスラーム法を勉強したという意味で敬意を持って接してもらうことはあるでしょうが、あくまでもただの人間です。庶民と変わりません。あるいは勉強中は他人に喰わせてもらっているという意味では庶民以下かもしれません。いずれにしても、神の前に人間は皆平等ですから、王様もそうですが、ウラマーが他の人々よりも宗教的に優越しているということは絶対にあ

り得ないのです。

【第４段階のおまけ】

バイアがどういうものか、概略をお話ししましたが、付け加えておきたいことが幾つかあります。一つはバイアの締結の仕方についてです。下の図をご覧いただきたいのですが、一番左の統治者Ａと人々は一対一の契約を結んでいますが、左から二番目の統治者Ｂとバイ



アを結んでいる人々の一部は統治者Ｃともダブって契約しています。そうかと思えば統治者Ｃと統治者Ｄのあいだにはどちらとも(だれとも)バイアを結んでいない人々がいます。全部アリなんです。こういう自由なあり方がバイアには認められているというのは面白いことです。なかには、人々とバイアを結んでいる統治者が、さらにまた別の統治者とバイアを結ぶなんていう入れ子状の状態も歴史上は珍しくなかったようです。

この図の真ん中に横たわっている「ウラマーのネットワーク」についても説明しておく必要があります。バイアは人々と統治者のあいだの統治権をめぐる社会契約なのですが、うまくいっているときはいいのですが、統治者がなにかけしからんことをした場合（ヘンなお触れを出すとか自分勝手なことをするとか)、理屈のうえでは人々はバイアを破棄すればいいだけの話ですが、契約である以上破棄には正当な理由が必要です。正当な理由がなければ統治者からしっぺ返しを食う可能性もあります。そこで人々は統治者がちゃんと公正と平等というイスラーム法を守っているのかどうか（つまりけしからんと思われることがイスラーム法に照らして本当にけしからんのか）をその道の専門家であるウラマーに相談したり訴えたりします。そしてイスラーム法違反だという回答が得られれば、それを根拠に統治者

との契約を破棄できます。一方統治者の側もそうなってはかなわないので、何かしようとするときには事前にウラマーに諮問したり確認したりします。そして「合法」だという回答を得ておけば、自分の権力行使はだれからも文句を付けられることはないわけです。このようにして、ウラマーは両契約当事者のあいだのクッションになり、また契約の監視人のような役目を果たすわけです。これがないと、何か問題が起きたとき、人々と統治者は直接対決せざるを得なくなり、「アラブの春」のような血なまぐさい事態を招来しかねません。そしてウラマーはこうした役目を果たすうえでは、特定の統治者に取り込まれてはならないわけで、政治権力からの独立性が求められます。これが集権制を必要としない、あるいは集権制を排するというイスラームのあり方と合致しているわけです。

**********-

以上でバイアの説明は終わりですが、バイアに関係する少し具体的なトピックを幾つかお話ししておこうと思います。これが結構面白いんです。

{トピック 1} どうやってバイアを締結するか

バイアは社会契約だということを先ほど説明しました。とすれば契約書を交わすのでしょうか。そして契約期間はどうなるのでしょうか。この契約は書面によらず、普通は対面して口頭でおこなわれます。しかも必ずしも契約式といった形はとらず、統治者が人々をパーティーなどに招待し、それに出席すれば契約が確認されたことになります。契約を結びたくない人は欠席すればいいのです。そしてこうしたパーティーは毎年おこなわれますから、契約期間は 1 年と考えてよいでしょう。1 年ごとの更新ということになります。なお、モロッコでは各地のザーウィヤの聖者祭もこのパーティーと同じ意味合いを持っていました。祭りに参加すれば契約更新、欠席なら契約破棄ということです。パーティーにせよ祭りにせよ、両当事者が同じ席について同じものを一緒に食べるということに重要な意味があるようです。

前回モロッコのイリーグ教団の話をしましたが、その主人公だったスィディ・アフマド・ウ・ムーサーは当時（15 世紀）モロッコを支配していたサアド朝スルタンから宴席に招待されたとき、これを断ったという伝説が残っています。これが意味するところはバイアを破棄したということと、自らが独立した力を持っていることの証だったと理解されています。西サハラ問題の話で登場したマー・ル・アイニーンも、強大なスルタンだったハサン 1 世とはバイアを結びましたが、その後のヨーロッパ勢に屈服しただらしない後継者たちとはバイアを結びませんでした。

現在国家レベルでバイアが生きているのは、いわゆる王制の国々で、サウジアラビア、オマーン、アラブ首長国、湾岸諸国、ヨルダン、モロッコなどです。モロッコの場合、国王は毎年の即位記念日に王宮に各界の代表者たちを集めて宴会をおこないます。この宴会がバイアの更新の機会になっています。実質的にはほとんど形骸化した儀式のように見えます

が、王制の正当性を確認する重要な意味を持っているんですね。この宴会には軍の代表や政府の代表、各県の代表、国会の代表、主要部族の族長、各イスラーム教団の代表、商工会議所代表・・・とほとんどすべての分野の代表者たちだけではなく、キリスト教団体の代表やユダヤ教徒の代表なども含まれるほか、欧米や日本などの外交団も招待されます。日本の大使はあまりバイアを認識していなかったようですが（笑)、招待に応じて出席するということは、彼が国王とバイアの関係に入る（あるいは更新する）ことの表明なんですね。そうすると、日本国を代表する大使がモロッコ国王とバイアを結ぶのだから日本国がモロッコ国王の庇護を受け、統治権を委ねることになるのか、と心配される方もいるかもしれませんが、その点は心配ご無用。バイアはあくまでも個人と個人が結ぶものであって、組織ではありません。全国の何千万人もの人々が王宮に入れるわけはありませんので、便宜上「代表」という形をとっているだけで、大使の場合も彼個人と国王の関係に限定されるのです。

{トピック 2} バイアは宗教を超える

日本国大使の場合にもそうだったのですが、バイアは宗教の違いを超えて締結可能です。1995 年にモロッコのスペイン系ユダヤ教徒コミュニティーの調査をスペイン研究の大御所である立石博高さん（東京外国語大学）とユダヤ・パレスチナ研究の大家である臼杵陽さん（日本女子大学）と一緒におこなったことがあります（私が書いたその報告に興味がある方は《堀内正樹 1996 「モロッコのユダヤ人」『一橋論叢』116 巻 4 号。pp.166-184》をお読みください。その際カサブランカにあるユダヤ教徒共同体本部を訪れ、代表のボリス・トレダーノさんに会いました。彼のオフィースの壁に掛かっていた下の写真をご覧ください。左の写真は先代のユダヤ教徒の代表が王宮で当時の国王ハサン 2 世と握手し、バイアを結んでいる様子とのことです。右はユダヤ教の有名なラビがやはり国王ハサン 2 世とバイアを結ぶ図だそうですが、真偽のほどはわかりません。いずれにせよこうしてバイアの写真を掲げているのですから、これは公然の事実ということは間違いありません。

いずれも右が当時の国王ハサン 2 世

そこで思い出したのが 1978 年の「キャンプ・デーヴィッド合意」です。イスラエル（ベ

ギン首相）とエジプト（サダト大統領）がアメリカ（カーター大統領）の仲介で平和条約を結ぶことにした歴史的な合意だとされています。1948 年のイスラエル建国以来不倶戴天の敵同士だったイスラエルとアラブ諸国の中で、アラブ側の中心的な役割を担っていたエジプトが手のひらを返すようにしてイスラエルに歩み寄ったわけですから、世間は驚いたわけです。ではどうしてそのようなことが可能になったのか。じつは鍵を握ったのはモロッコ国王ハサン 2 世だったのです。イスラエルにはモロッコ出身のユダヤ人がたくさんいます。その人たちはイスラエルに住んで、イスラエル国籍を持つれっきとしたイスラエル国民なので、大臣などイスラエル政府の要職に就いている人もたくさんいます。しかし彼らの多くはモロッコ国王とのバイアを保ち続けていたんですね。モロッコは国家としてのイスラエルとそのイデオロギー的支柱であるシオニズムには徹底して反対し、認めてきませんでした。ちなみに聖地エルサレムをシオニストの手から解放するという大目的のために結成されたイスラム協力機構（結成時はイスラム会議機構）の呼びかけ人兼オーガナイザーだったのはモロッコ国王とサウジアラビア国王だったくらいです。しかし国家と個人は別だという立場をモロッコはとっています。ですからモロッコ出身ユダヤ人が個人としてモロッコ国王とバイアを維持するのはなんの問題もないわけです。実際彼らがモロッコにある父祖の墓を詣でに来るのをモロッコは拒みません。そんなわけですから、モロッコ国王はイスラエルの政治家とのパイプは確保しているし、エジプトとは数次にわたる中東戦争の盟友ですから当然パイプはあります。そこでモロッコの高原の避暑地イフランにある国王の別荘に両者を呼んで会わせ、極秘の準備会合を開き、合意が出来上がったところでアメリカを担ぎ出して「キャンプ・デーヴィッド合意」として発表したというわけです。

イフランの王宮別荘（1986 年）

モロッコの古都フェズのユダヤ人墓地に里帰りしたイスラエルの若者（1995 年）

{トピック 3} バイアは境界を超える

今の例からもわかるように、バイアは国境を超えて、地球大に広がっています。これはなぜかというと、バイアは個人と個人が結びますから、その個人がどこか遠くへ行けば（今の例だとイスラエルへ行けば）、バイアはその行った先まで伸びてゆくからです。あるいは最初から遠くにいる人がバイアを結んでもなんの不都合もありません。地理的な距離や境界

線はバイアにとっては無意味だということになります。ですからたとえばサウジアラビアの地図を見ると、イエメンおよびオマーンとの境界部分ですが、海岸部以外の内陸には国境線が書かれていないものがあります。海岸部には人の住んでいる町や村があるので、その住人がどことバイアを結んでいるかによって「国境」を設定することも可能ですが、内陸部にはほとんど人がいないか遊牧なので、境界線は不要なんです。なお、これらの国々で何度か国境線確定協議が行われたようですが、合意されたり破棄されたりで、結局どうなっているのかよくわかりません。

同じようにモロッコ政府発行の地図を見ると、モロッコとアルジェリアの境界部分も、やはり海岸部以外には国境線がありません。1960 年代から 70 年代に国境線画定合意がなされたともいわれていますが、サウジアラビアの場合と同様に、その実効性は疑問符です。

サウジアラビアもモロッコも西欧の中東侵略以前から続いてきた伝統的なバイア国家です。バイアによって成り立つ国に国境線は馴染まない。じつに興味深いです。

次に、例として挙げるのにはちょっと躊躇もあるのですが、皆さんもよくご存じの「イスラム国(IS)」を思い出してください。あれがはじめからイラクとかシリアとかの国境線を無視していたのは覚えていると思います。そして「実効支配地域」と呼ばれてニュースなどでよく出された地図はどうなっていましたか。まだら模様の一向にまとまりのないものがその都度出されて、そのたびにその支配地域なるものの範囲が変わっていたと思います。あれはなぜかというと、戦闘の結果というよりも、おそらくバイアの締結状況を反映しているのだと思います。彼らの広報部のホームページを見ていたら（頻繁にリンクが切られるので、そのたびに新たに探し出すのは容易ではありませんでしたが)、どこそこ村で何々部族の族長とバイアを結んだ、といった記事が彼らのニュース欄に頻繁に掲載されていました。広報の重要な項目なのでしょうね。イスラム国のバイアというと戦闘組織間の「忠誠」関係が取り沙汰されることはありましたが、本来は住民とのバイアが重要なんですね。ただこれもニュースネタであり、信憑性を確認できないので突っ込んでみてもあまり意味がない。ただしバイアという概念が決して過去の歴史に登場するだけの過ぎ去ったものなどではなく、現在でも機能している重要な概念であること、そしてそれは面としての地理的領域に拘泥しない融通無碍なものであることが再確認できれば、それだけでも意味があったといえるかもしれません。

****

バイアについてはまだまだ語るべきことはたくさんあります。たとえば統治者はなぜよそ者が適しているか、あるいは統治者の仕事とは支配することではなくて調停・仲介・バランスをとることなのだ、等々。また機会があればそうしたことも話しましょう。

おわり